

鏡像段階成立過程に関する試論的検討

大 倉 得 史

1. 鏡像段階論とその問題

精神分析家ラカンは、生後6ヶ月から1年半の間に、幼児が鏡像段階と呼ばれる一過程を通過すると指摘した（Lacan, 1966/1972; 新宮, 1995; 新宮・立木, 2005）。

人間の乳児は他の生物に比べ神経系統が未発達な状態で生まれてくるため、まだ運動感覚や姿勢感覚、その他の体内感覚が協和的・統合的に機能していない。したがって、よちよち歩きを始めた頃の幼児は諸器官の有機的一統が不十分な、バラバラな身体感覚の中で生きている。このように内面的な統一的自己像を持たない幼児が鏡に映った自らの姿を目にすると、まず先に外側の視覚像によって自己の統一性が実現されることになる。言い換えれば、幼児において自己の統一性は内面から支えられるより前に、外側の「見え」によって先取りされるのである。

このことは非常に強い体験となるようで、幼児はこの自己像を知覚することに大きな喜びを覚える。“おそらく内面の未統一性との間の落差が、その歓喜を作り出すのであろう”（新宮, 1995, p171）が、こうして人間は鏡像を通じて「見え」の次元のうちに設立された自己像—したがって、主体にとっては本質的に他者的なものの次元、鏡という虚の世界にある像—に愛着を抱き、これを「自我（私）」として引き受けて（同一化して）いく。私たちの「自我（私）」は、このように「他」を構造的に含み込んだ形で成立してくるのである。

ラカン、この鏡像段階を端緒として人間存在の根本に「他」が導入され、やがて言語の世界（象徴界）という「他」に主体が絡め取られていく必然性が用意されると考えた。実際、成人になって神経系が十分に成熟し、内面の統一的感觉が確立した後も、「私」の存在は単なる生物学的身体以上の何かとして感じられる。「社会に生きる私」、「歴史の中の私」、「こう振る舞わねばならない私」等々、意味ある私の感覚やアイデンティティの感覚というのは、主体が自らを言語的にどのように位置づけているかということと密接に関わっているし、そうした位置づけを欠いてしまうときに「私」が見失われ、バラバラな感覚にさいなまれる—あたかも内面の不統一性に苦しんでいた幼児期が再燃するかのよう—toいった不思議な現象（アイデンティティ拡散など）が生じもするのである（大倉, 2002）。鏡像段階とは、主体にとって「他」なる場に「私」が設立されることによって—あるいは「私」の中に「他」の場ができることによって—一生じる人間存在の苦悩のドラマの幕開けとして、極めて重要な意味を持つ過程である。

このように非常に示唆に富み、完成されてもいるラカンの鏡像段階論であるが、発達心理学的観点からは依然として明らかにされていない問題がいくつかあると思われる。

例えば、鏡像段階とは一体どのくらいのスパンで進行するものなのだろうか。人生の他のどの時期よりも発達が速いとは言え、やはり乳幼児の能力は漸次的にしか増大しない。鏡に映った自分の姿をそれと分らない状態から、これが自分であるという鏡像認識を得るまでに—もちろんまだ言語化はされないだろうが—、たった一度きり鏡を見ればそれで済むということはまずないだろう。生後6ヶ月から1年半という、この時期の幼児にとってはかなり幅のある期間が考えられているが、この間、どのようなプロセスを経て鏡像段階は成立していくのだろうか。

また、この時期の幼児を直接観察してみると、彼らが内面的な不協和の感覚、バラバラな身体感覚にさいなまれているという説にも、直ちに首肯するわけに

はいかなくなってくる。スターンは生後2～6ヶ月の乳児ですらすでに独自の情動生活、一貫性、意志を持つ身体的存在としての自己（中核的自己感）を体験していると述べているし（Stern, 1985/1989）、ピアジェも生後8～9ヶ月の幼児がそれまでの単純で反復的な行動図式を組み合わせ、直接には近づけない目的に到達するための意図的行動を作り上げるようになるとしている（Piaget, 1948/1978）。養育者が主導的に関わり、子どもはどちらかと言えば受動的に回答していた状態から、お座りやハイハイができるようになり、子どもから主導する行為が増えてくるにつれて、それを見る者には確かに子どもが一個の自律的存在になってきたと感じられるし（鯨岡, 1999b）、恐らく子ども自身の内部感覚もそれに応じた何らかのまとまりや統一性を有しているに違いないという印象が強まってくるのである。だとすれば、“内面の未統一性との間の落差”（新宮, 1995, p171）が統一的な鏡像への歓喜に満ちた同一化を動機づけるという論理には幾分修正の余地があるかもしれない。

今提起した二つの問題は、多くの精神分析学諸理論と同様、鏡像段階論が乳幼児の直接的・継続的な観察によってというよりは、むしろ成人期の精神病理を理解するための論理的要請によって案出されたものであるということと関連しているように見える。スターン（Stern, 1985/1989, p16）も指摘するように、発達心理学的観点から直接観察される言葉をしゃべれない「被観察乳児」と、精神分析学が再構成していく物語的な主観世界を有する「臨床乳児」とのあいだには、しばしば大きなギャップがあるが、ラカンの立論も（この両者を接合しうる可能性を感じさせるものになっているとは言え）まだ幾分後者の色彩が強いために、これを直接観察される乳児の姿と結びつける際に若干の違和感が生じるのである。したがって、発達心理学、精神分析学双方の知見を接合し、より豊かな統一的乳幼児理解を作り上げていくためには、鏡像段階がいかに成立していくかという問題を発達心理学領域で立ち上げるとともに、その観察に基づいて必要ならば鏡像段階論に微修正を加え、その本質をより明確にしていこうといった作業が必要になるだろう。

2. 発達心理学における先行研究とその問題

鏡像段階がいかに成立するかという問題を立ち上げる—今そのように述べたのは、私見では必ずしもこの問題が発達心理学領域で適切に取り上げられていないからである。もちろん、この問題に答えるための示唆を与える研究は少なくない。

麻生 (2002) によれば、1978年、バーテンサルとフィッシャー (Bertenthal, B. I & Fisher, K. W.) が鏡による自己認知の発達について調べている。彼らは5段階の課題を設け、各月齢の自己認知の平均「段階」を算出した (表1、2 参照)。

表1. 鏡による自己認知の5つの「段階」

	課題の 名 称	課題の内容	課題を合格する基準
第1段階	触覚的探索課題	鏡の前に座らせる。	3分以内に、自己の鏡像を見つめつつ、手で触れその像を探索する。
第2段階	帽子課題	特別製チョッキの背中に棒がさしてあり、子どもの頭の上15センチほどに棒の先の帽子がくるようになったチョッキを子どもに着せて、鏡の前に座らせる。	2分以内に鏡を見る。そして即座に自分の上の帽子を見上げ、それ (現実の帽子) に手を伸ばしつかもうとする。
第3段階	玩具課題	子どもの背後の天井から紐でつるした人形が降ろされ、子どもの視線の高さよりほんの少し上でストップする。	30秒以内に、人形の像を見つめ、そして即座に現実の人形のほうを振り返る。
第4段階	口紅課題	子どもの鼻に口紅をつける。自由遊びをさせてから、鏡の前に座らせる。	3分以内に鏡を見て、鼻に触るか、鼻に何か変なものがあると言う。
第5段階	名前課題	母親が子どもの側に立ち、子どもの鏡像を指差して「あれは誰？」と3回繰り返し尋ねる。	母親の質問に答えて、即座に自分の名か、適切な人称代名詞を言う。

表2. 各月齢群8名(計48名)の自己認知の平均「段階」

月齢(8名)	6ヶ月	8ヶ月	10ヶ月	12ヶ月	18ヶ月	22ヶ月
平均「段階」	1	1.9	2.4	2.2	3.8	4.8

表1、2ともに麻生(2002, p65)より

これによると、目の前に現れた鏡像に単に興味を示すだけの第1段階を越えて、鏡の映像と現実世界の事物とが何らかの形で協応していることに(恐らく感覚的に)気づき始める(第2～3段階)のが生後8ヶ月から12ヶ月の間であり、さらに幼児の鏡像認識を確かめるためにしばしば用いられる口紅課題(第4段階)にほぼ合格できるようになるのは生後18ヶ月を待ってからということになる。幼児が鏡像を自らのものとして引き受けた結果、初めてこの第4段階に合格できるようになると考えられるから、生後6ヶ月～1年半(18ヶ月)に鏡像段階を通過するというラカンの説は、この実験結果からも裏づけられると言える。

ただし、この実験からは、どのように鏡像段階が成立していくのかという先ほどからの問題に対する解答は十分得られない(唯一示唆的なものがあるとするれば、幼児にとって自己像よりは自分以外の事物についての方が、鏡像と事物の協応関係の把握が易しいらしいということであろう)。そもそも実験場面において、口紅のついた自分の顔を見て「おかしい」という反応をするためには、それ以前の日常生活で鏡に映る自己像を確かに自分のものとして眺めるという経験を何度となく積み重ね、「いつもの自分」のイメージが固まっていなければならない(その「いつもの自分」と違うからこそ「おかしい」わけである)。すなわち、第4段階の課題に合格できるような幼児は、すでに鏡に映った姿が自分の姿であるということが当たり前のように分かるようになっていると考えられるのである。

それに対して鏡像段階論というのは、言わば「初めて」鏡に映った姿が自分だと分かった際の幼児の感動を描いた理論である。それがいかに生起し、そこで実際に何が起こるかという問題に対して、こうした実験法でアプローチする

のはかなり困難だと言わざるを得ない。鏡像認識に限らず、実験で与えられた課題に対して幼児がきちんと合格するためには、当該の能力がかなり定着・安定し、間違いなく遂行できるものになっていなければならないが、それゆえにこそ、実験法ではその能力の微視的な生成・発展プロセスを追うことが難しい場合がある。

ところで、生後6ヶ月から18ヶ月の間に鏡像認識が進むということから、当然考慮に入れなければならないのが、生後9ヶ月前後に起こると言われる大きな変化であろう。すなわち、この時期、養育者との二者関係が中心だった生活からモノを介した三項関係が目立ってき（やまだ, 1987）、注意を引かれる事物を指差したり、他者の見ているところに視線を向けたり（共同注意: joint attention）、他者が新奇なものに対応する仕方を参照したりする（社会的参照: social referencing）といった、それまでに見られなかった行動が次々と出現してくるのである（塚田, 2001）。これらの現象が生じる理由としては、他者を意図的行為主体として理解できるようになることが指摘されており（Stern, 1985/1989; Tomasello, 1995/1999）、この大きな発達的变化を基盤として他者の注意を引いたり（指差し）、それを共有したり（共同注意）、他者の意図を自らの行動に役立てたりする（社会的参照）といった諸行動が出現してくると考えられている。

こうした諸々の変化との発達の同期性から見て、これら諸変化と鏡像段階とは密接に関連していると考えるのが自然であろう。実際、少なくとも鏡に映った像を意図的行為主体、他者に類する人物としてみなすことができれば鏡像段階は決して成立しないだろうし、三項関係や共同注意が子どもの言語獲得に重要な役割を果たすといった指摘（Baldwin, 1995/1999; 岩田・吉田・山上・岡本, 1992; やまだ, 1987 など）は、言語世界への参入の契機という鏡像段階論の含みに照らしても興味深い。

しかしながら、これら諸々の変化と鏡像段階が具体的にどのように関連しているのかということは、先行研究では必ずしも明らかにされていない。もう少

し言えば、発達心理学領域では、これら諸変化の原因にしても結果にしても全て認知能力の発達として捉えて終わる傾向が強い。例えば、他者を意図的行為主体として「理解」できるようになったり、鏡像を自己の姿と「理解」できるようになったりするのには「認知能力」が高まったためであるし、その結果として、他者の注意している方向に自分の注意を向ける「能力」や言語「能力」の発達が促進される、といった具合にである。ところが、実はここで「理解」や「能力」といった言葉で何が名指されているのかはかなり曖昧であるし—まだ言葉話を話さない幼児が何かを「理解」するとはいかなることなのか—、各種の「理解」や「能力」がいかなる関係にあるのかということも、なかなか見えてこない。

だが、ここで注意をしておかねばならないことは、鏡像段階論というのは単なる（認知）能力の発達に還元しておけばそれで済むような理論ではないということである。メルロ＝ポンティの言葉を借りれば、鏡像の習得とは、これまで自分自身の全体像を一度も見ることがなかった幼児が初めて“自分自身の顧客たりうる”ようになることであり、“自分が自分自身にも他人にも見えるものだということに”気づくことである。すなわち、単に身体感覚として感じられていた自己感から対象化された可視的自我（を含みこんだ自己感）へ移行するということは、“パーソナリティの或る形態・或る状態から別な形態に移ること”であって、それは“世界や他人に対する認識関係の問題であるばかりか、存在関係の問題でも”あるのだ（Merleau-Ponty, 1962/1966, pp162-164）。つまり、幼児の存在の仕方、世界の体験の仕方が、鏡像段階を経ることによって一変し、そこで導きいれられた「他」の次元がその後も人間存在のあり方を根本的に規定するというのがこの理論の核心である以上、私たちが鏡像段階論を発達心理学領域で検討するというときには、これを認知能力の発達にではなく、常に「鏡との出会いにおいて幼児がどのような体験をするのか」という体験仕方（体験構造）の問題にこそ帰着させねばならないのである（大倉, 2008）。

少し角度を変えれば、次のように言うこともできる。

これまでの発達心理学は乳幼児を他者から切り離された一個の個体とみなすところから出発し、そこから乳幼児がいかに他者を「理解」できるようになっていくかという問題の立て方をしてきた。そして、その当然の帰結として、他者の内面性を「推測」できる認知能力の発達過程に焦点が当てられるとともに、観察者が乳幼児を観察する際にも、その内面性は目に見える形で外的に現れる諸行動から「推測」するほかない（Stern, 1985/1989, p16）という前提が導き入れられた。

ところが、このような前提から出発してしまうと、結局、人間はまず所与のものとして与えられている自己の内面性を手掛かりに、自己と他者の外面的行動の類似性や異質性を吟味しながら、自己の内面性を（必要であれば修正しつつ）「投影」という形でしか、他者の内面性を構成できないことになる。例えば、トマセロが生後9ヶ月頃に意図的行為が可能になるというピアジェの説を引きながら、“幼児が最初に意図性を理解するのは、彼ら自身の意図的な行動を通して”であり、“他者の理解に関する新たな段階への刺激となるのは、子どもの自分自身の行動に関する一内側からの一知識である”（Tomasello, 1995/1999, p112）と述べるとき、それはこうした図式に基づいている。だが、もしそうだとするならば、そもそも幼児は自己の意図性を投影すべき他者を一さまざまな事物に満ちあふれたこの世界の中から一どのように選別しているのだろうか。「自己と他者の外面的行動の類似性や異質性を検討」するための視点というのは、あらかじめ他者が外面に現れない内面性を持つことを了解し、自己と異なりつつも似通った存在者として他者を位置づけているのでなければ可能にならないのではなかろうか（他者が意図的行為主体であることを理解するようになるメカニズムの説明として、これでは同語反復になってしまう）。このように、“精神ないし自我が自己自身とのその接触によって定義され”、意識が他者とは切り離された個体の内部に閉じ込められてしまうと（そこから出発すると）、結局、“私の意識から出発し、われわれの行動の類似性を確認することによって

他者の意識を結論する擬似一解決”(Merleau-Ponty, 1988/1993, pp50-54)に陥る他なくなってしまうのである。

このアポリアを抜け出すために、私たちが着目しなければならないのは、言うまでもなく身体である。論理的に「推測」し「理解」する以前に、この生きた身体を携えて他者と向かい合うとき、私の意識に（私自身の内面性というよりは）他者の体験こそがまず与えられてくる場合がある（鯨岡, 1997）。例えば、苛立っている人の傍にいてふと気づけばこちらまで苛立っているとき、あるいはボクシングを観戦していて思わず敵のパンチをよける動作をしてしまうとき、さらには酸っぱいレモンをかじる人を見て思わず顔をしかめてしまうとき、私たちは何も自己と他者の行動を引き比べ、目に見える他者の行動の「向こう側」（他者の内面）を推測する結果そうするわけではなくて、まず先に他者の体験している（しようとしている）ものと同種の体験を生きてしまっている（むろん、レモンをかじる人を見ていても、味覚的に酸っぱさを感じるわけではないから、この体験は全く同じものというよりは、あくまで各感覚モードを超える共感覚のレベルで同型的なものだろうが）。また、怒りに震える人を前にして思わず身がすくむときや、母親の愛しげなまなざしを受けて乳児がうれしそうに微笑むときのように、他者の志向性が向かう先を「ここ」に感じて、他者の体験と相補的な体験が生じることもある。身体の共同性に根ざしたこうした同型性や相補性は、原初において自己の内面性についての意識が芽生える以前に存在する、より根源的な事実である（浜田, 1999）。

このように、他者経験—特に乳幼児期の原初的な他者経験—について考える際には、“論理的操作ではなく（kein Schluß, kein Denkkakt [推論でも思考作用でもなく]）、生きた操作が問題”（Merleau-Ponty, 1988/1993, p53）となるような次元から出発しなければならないのであり、自己と切り分けられた他者—「私」には不透明ではあるけれど、何らかの内面性を有するらしい他者—に対する「推測」や「理解」といったものが問題になる地平—大人たちが通常生きている地平—が、こうした原初的な他者経験の中からいかにしてできあがってく

滅しているのに興味を持っていた様子であったが、何度かやっているうちに鏡像段階論との絡みでいくつか興味深いエピソードが生じてきた。以下で分析するのは、そうした経緯で抽出されてきたエピソードである。



A

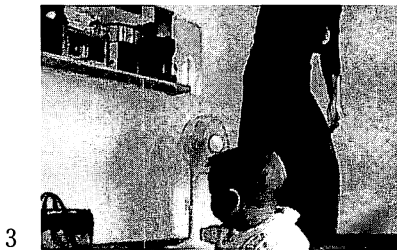
4. 結果（エピソード）と考察

エピソード1 初めてのビデオに興味津々 [0:7:16]

初回時の観察。1週間前から「ちゃんこ（お座り）」ができるようになったKちゃんは、初めて見るビデオカメラとそれを持っている私に興味があるらしく、お母さんに抱かれながらくりっとした大きな目を見開いてこちらを見ている（写真1）。Kちゃんの興味が向かう先を感じたのか、お母さんはKちゃんをビデオカメラに向けて床に座らせてあげる。まだスムーズにはハイハイができないこともあり、Kちゃんはその場で前のめりの姿勢になって、私とビデオカメラを交互に眺めている（写真2）。お母さんはKちゃんの注意がビデオに向いているのを確認しながら、そっと立ち上がって自分はKちゃんの背後に立ち去ろうとした。

Kちゃんはそれに気づいて後ろを振り返り（写真3）、お母さんが行ってしまふのを見て、「ンーン」と声を出しながらあわてて態勢を立て直そうとする。そのとき、私が思わず「あ、ママあっち行ったよ」と言ってお母さんの方向を

指差すと、突然の私の声かけに「なんだ？」とでもいうように、Kちゃんは四つん這いの姿勢のままじっとこちらを見つめてきた(写真4)。指差しはまだ分からないはずだと気づいたが、それでも不思議そうな表情でじっと見つめてくるKちゃんのまなざしにやや戸惑いながら、「あっち、あっち……まだ(指差しは)無理かな」などと言いながら引っ込みがつかずに指差しを続けていると、「指差しと鏡がまだ分かってない」とお母さん。「まだ、鏡とかはだいぶ先ですよね」と私が言うと、傍にいたお父さんが「え、鏡、分かるよ」と口を挟んできて、その後大人3人でしばらく鏡談義をする。Kちゃんは会話する3人の顔を交互に見上げている。



考察1

母親の話によれば「ここ1ヶ月くらいで10分くらいなら一人でいられるようになった」Kちゃんは、ウェットティッシュの箱や吸盤のついたおもちゃ、台所にかかっている風鈴など、いろいろな事物に興味を持つようになっており、手の届く範囲にそれらがあるときには盛んに振ったり、嘗めたりする。初めて

見たビデオカメラにはとりわけ興味を引かれたようで、初回の観察時から何度かこちらをじっと見ている場面があった。モノの世界へ関心が向けられ始め、人との関係の他にモノとの関係ができてきているようにも見える（やまだ、1987）。

だが、こうした事物への「関心」は多分に周囲の他者の存在に支えられていることは見逃せない。その「関心」は養育者がKちゃんの興味を引きそうな事物をその視野の中に差し入れてあげたり、（ここでのエピソードのように）Kちゃんの興味を敏感に察知してその事物へと向かわせてあげたりしなければ、容易に引込んでしまう程度のものであろう。まだ、自分では十分に方向転換をしたり動き回ったりできないこともあり、興味を引かれる事物への強いこだわり、意図性といったものはさほど感じられない。むしろ、母親が離れていくのを見て少しあわてたところを見ると、観察者やビデオカメラのような新奇な対象については、やはり母親が傍にいてくれるという安心感がないと探索できないのであろう。

また、事物への興味が生じてくる背景には、事物そのものに属する要因の他に、周囲の他者が扱っているモノに引きつけられるということ一つまり、周囲の他者の身体とKちゃんの身体が同型的に重なって、「あの人がやっているようにできそうな気がする」という形で思わず手が出るということ一も大きな要因としてあると思われる（鯨岡, 1999b）。実際、ここでのKちゃんも単なる「ビデオカメラ」というよりは、「観察者が扱っているビデオカメラ」ないしは「観察者とビデオカメラの全体」に興味が引かれるとでもいうように、観察者とビデオカメラを交互に見つめている。

このように、これから段々と自由に身体を動かせるようになり、行動図式が複雑化してくるという個体能力の発達（Piaget, 1948/1978）や、Kちゃんに関心が向くところを敏感に察知し、それに応えようとしてあげる養育者の支え（常田, 2007）、さらには周囲の他者との同型的・相補的な間身体的関係性とが絡み合う結果、“子どもを意図する主体として受け止め、そのように子どもを扱う

ちに、いつしか子どもは本当に意図する主体になっていく”(鯨岡, 1999b, p206)ということが可能になるのだと考えられる。

ところで、このエピソードで観察者は思わず指差しでもってKちゃんの後方にいる母親を示そうとする。一般に指差し理解は1歳の終わり頃に出現されると言われるが、視野外の対象については、生後12ヶ月の幼児でも指差しが分からないとされる(Butterworth, 1995/1999)。Kちゃんにとって、背後の空間というのはまだ非常に「近づきにくい場所」であることは間違いない。

したがって、ここでの観察者の振舞いは、Kちゃんにとっては馴染みの薄い他者が新奇な働きかけをしてきたものとして感じられたことだろう。数秒間、母親を追いかけるのも忘れたように、観察者とじっと見つめ合う。言葉も身振りの伝わらないKちゃんにまじまじと見つめられて、観察者自身どうしていいか分からなくなってしまったほど一ちょうど海外で自分の英語が通じなかったときの焦りにも似ていた一、その見つめ方は観察者が何を言おうとしているのか懸命に読み取ろうとしているようでもあった(ただ単純に新奇な他者に引きつけられただけだという見方も当然成り立ちうるが)。もしそうだとすると、何かを語りかけようとする観察者の「意図」というものが存在することに、Kちゃんはすでに感じていると見なければならないし、仮にこの場面では観察者の振舞いにびっくりしただけだとしても、自分に何かを話しかけようとする養育者の「意図」というものには、すでに普段から感じていると見るのが自然だろう。実際、このエピソードの最後、大人たちが鏡談義をしているときに、あたかも3人の言葉のやりとりを目で追うように一テニスの試合と同様、「会話のラリー」を目で追うかのように一3人の顔を交互に見ていたが、そこでは明らかに大人たちの発話が自分に向けられたものでないことは分かっているのである。

トマセロが「他者のことを意図的行為主体として分かるようになる」と言うときの「意図」とは何だろうか。今述べたような「発話者の志向性」「関わり手の志向性」を「意図」と呼ぶならば、別に9ヶ月にならなくても幼児はその存

在を感じているし、周囲の他者の働きかけが自分に向かっているか否かぐらいは分かると言えよう。もちろんその「分かる」はトマセロの言うような認知的な「理解」というよりは、身体の同型性と相補性を基盤にした直感的な「分かる」であろうが、だからこそ、その後のより明確な「意図」の「理解」もこの身体的な「分かる」が発展し複雑化したものだと思えていくことが必要ではなからうか。周囲の他者が「意図」を持つことを知らなかったが、自らの内面の「意図」に気づくようになり、それを「投影」する形で他者の「意図」を分かるようになるという考え方には、やはり無理があるように思える。

最後に、大人3人の鏡談義の中で、やはりKちゃんはまだ鏡像認識はできないらしいということが明らかになった。母親によれば買い物のときに鏡の前で遊ばせても全く反応しないという。父親は玄関の鏡を見て反応すると言うのだが、母親によれば恐らくそれは単純に「人がいる」と思っているのだろうとのこと。現実の人物と鏡像との協応関係に気づいているわけではなく、単に「向こう(鏡の中)に人がいる」ということへの反応だったらしい。実際、[0:8:8]の時点でも、「これ、Kちゃんだよ」といくら指差して教えてあげても、自分が大映しになった写真に全く興味を示さず、他の紙と同様、ぐしゃぐしゃにしようというエピソードが観察された。

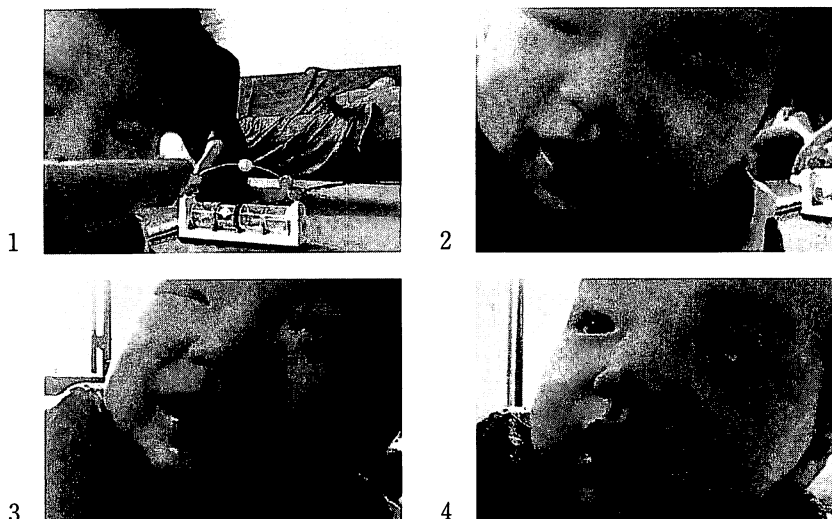
エピソード2 液晶画面を初めて見て [0:10:1]

お母さんとおもちゃで遊んでいたKちゃんは、おもちゃを床にたたきつける遊びをひとしきりすると傍らのビデオカメラと私に目を向け、ハイハイして近づいてくる。お母さんはKちゃんがビデオに絡むと観察ができなくなってしまうと、背後から「Kちゃん」と呼び止めようとしてくれるが、Kちゃんはそれにはお構いなくビデオカメラに興味津々といった様子で、「ンエ」と声を出して、レンズをつつく。私が「あ、突いた」と言うと、私をちょっと見上げ、それからまたビデオを触ろうとする。背後でお母さんが「Kちゃん、Kちゃん」と呼びながら、空のペットボトルでパンパンと床を叩くので、私も「Kちゃん、呼ん

でるよ」とお母さんの方を指差すが、ビデオから全く目を離さない(写真1)。ビデオにぶら下がっているレンズキャップやビデオの裏側(私が見ている側面)が気になるらしく、液晶画面に手をかけて裏返そうとする。

私は最初、小さな声で「あー(やめて)」と言いながら、Kちゃんの手を制止していたが、ここで「この液晶画面をひっくり返してKちゃんに向けたら、ちょうど鏡を見るのと同じことになるのではないか」と思いついて、Kちゃんが映っている液晶画面をくると回転させてやった。それを見てKちゃんは「ア?」と声(いつもより高いトーンの、「なんだ?」といった調子)を出し、それからちょっと興奮したようにハアハアと息をはずませ、「アハ」と言って笑顔になる(写真2)。思った以上に画像に反応しているので、私もうれしくなって笑いながら「なんだこれは?なんだこれは?」と、Kちゃんの気持ちを代弁してやる。数秒間、興味深そうに液晶画面とレンズを見比べているKちゃんに対し、「これKちゃんだよ、これKちゃんじゃない?」と画面を指差し、(次にKちゃんの気持ちになって)「あれー?」と言ってあげると、Kちゃんは私の方を見上げ「ンー」としぼり出すような声をあげ、何ともうれしそうな満面の笑みになる(写真3)。何か二人で面白い発見でもした気分になって、「あれー、自分が映ってるよ」と言うと、Kちゃんも面白そうにもう一度液晶画面とレンズを見てから、再び「ンクー」と私を見上げて笑う。

私は「自分が映ってるよー」と言い続けながら、もう少しこの発見を二人で楽しもうと思ったのだが、意外にもKちゃんはそれからすぐにレンズキャップをいじりだした。再び液晶画面に注意が向いたときに、「これは?」と問いかけると、また少し笑顔になりかけたので私が「ワアー」とKちゃんの気持ちを映し出そうとすると、どうもそれが大げさすぎる声かけだったようで、ふっと笑顔が消えて、不思議そうに私の顔を見る(写真4)。それから後は、液晶画面を見ているKちゃんに「これ自分なんだよ」と教えてやるが、私の顔をぼかんと見つめたり、わずかに微笑んだりする程度の反応だった。



考察 2

ハイハイができるようになって以降、毎回のようにKちゃんがビデオカメラに近づいてきていじろうとする一場面が観察されたが—Kちゃんとしては、いつも観察者が扱っているようにビデオを扱ってみたかったのかもしれない—、あまり好き勝手にいじらせてしまうと撮影ができなくなってしまうので、観察者はKちゃんがビデオカメラを違う方向に向けたり、変なボタンを押したりしないよう、その手を制止しつつ適当に触らせておくという対応をとっていた。一方、鏡像段階論への学問的関心はあったものの、先行研究の知見から鏡像認識はまだ先だろうと考えていたこともあり、鏡を使った実験などをするわけでもなかった。そういう意味で、ビデオを使って鏡を見たときと同じような状況を再現してみようと思いついたのは、Kちゃんの興味と観察者の関心がうまく合わさった結果だったと言える（なおビデオカメラの液晶画面は反転させると、映像も左右反転し、ちょうど鏡と同じように映る仕掛けになっているが、録画される映像自体は元の正しい向きのものであり反転前と変わらない）。

ここでのKちゃんは、はたして液晶画面に映った姿を自分の姿だと分かったのだろうか。

初めて液晶画面を見た一つまり、画面に映った自分の姿ばかりか、液晶画面の裏側（映像が映っている面）を見たこと自体が初めてだった—Kちゃんは、「あれ?」と言わんばかりの高い声を出し、食い入るように液晶画面を見つめる。そして、「これKちゃんだよ」と観察者が画面を指差してやると、「シー」という声をあげて、こちらを見上げ何とも言えないうれしそうな表情（にんまりと笑う感じ）をする。観察者はこのとき「あ、自分だと分かったのかな」と思ったのだが、もしかしたらこれは観察者の思い込みだったかもしれない。すなわち、初めて見た面白い対象（液晶画面）に対して、観察者とともに注意を向けていること自体、観察者とその面白さを共有できていること自体がうれしかったのであり、必ずしもそこに映っているのが自分の姿だと分かっていたわけではないのかもしれない。つまり、ここでのエピソードは鏡像認識を示したものであるとして読むよりは、むしろきれいな共同注意のエピソードとして読むべきなのではないか。

実際、ある程度液晶画面を見飽きてしまう—ずっと同じ顔が映っているわけだから—と、Kちゃんの関心は再びレンズキャップの方に向いてしまう。観察者の頭には「幼児が初めて鏡の自己像を分かったときの感動」という鏡像段階論のストーリーがあるから、レンズキャップをいじりながらときどき液晶画面を見るKちゃんに対して、相変わらず「あれ、自分が映ってるよ」などと話しかけるが、どうも「観察者の感じるKちゃんの気持ち」と「実際のKちゃんの気持ち」のずれが目立ってくる。画面を見て少し微笑みかけたKちゃんに、観察者は先ほどの何とも言えないうれしそうな表情の再現を予期して思わず「ワー」と言ってしまうが、Kちゃんの方はその声にびっくりしたようで、笑顔がふっと消えてしまった。恐らくKちゃんにとってはなぜ観察者がそこまで液晶画面にこだわるのか分からなかったのではないか。

実はこのエピソードにはもう少し続きがあり、観察者がレンズの前でKちゃ

んと横並びになって一緒にビデオに映ったりしてみたのだが、やはりレンズキャップをいじりながら観察者を見て笑う程度の反応で、その後も観察者がビデオに映ったり画面から消えたりしているとパタパタと逃げ出してしまった。恐らくKちゃんにとってはまだビデオ映像の意味やそこに映った姿が自分の姿だということは、十分に分からないのだと思われる（むしろ少し気味悪くさえあるかもしれない）。仮に自分の姿だと何となく分かっていたとしても、身体内部で感じられている自己感とその可視的像が接合されるところまではいっておらず、したがって、それは取り立ててびっくりするようなことではなかったらしいのである。

共同注意において、幼児は他者と同じモノを見ながら相手の身体に自らを同型的に重ね合わせるとともに、他者とのあいだでそれぞれが見ていることを相補的に確認し合う（浜田, 1999）。言い換えれば、他者の視点に立ってモノを眺めると同時に、他者が見ている先の位置に入って、相手のまなざしの中に相手の気持ちを確認する。液晶画面という興味深い対象に対してKちゃんと観察者が同型的に視点を重ね合わせ、相補的に見つめ合うことでその面白さを確認し合ったのがエピソードの前半部分、その「面白さ」の中身が実は二人のあいだで微妙にずれていて、同型的な視点の重ね合わせも相補的な気持ちの確認もごくしゃくしてきたのが後半部分だと言えるだろう。観察者にとって（そして恐らくKちゃんにとっても）、そうした噛み合わなさが確かに感じられたために、「ああ、確かに自分の姿だと分かってくれたのだ」といったような手応えまでは得られなかったのである。

エピソード3 見えるものと見えないもの [0:10:28]

①今日もビデオを回し始めると、いつものようにKちゃんが近寄ってくる。ビデオの三脚に興味があるらしく、脚の一本を持ち上げてビデオを上下させ、床に打ち付けるようにして遊ぶ。私が別の脚を持って、打ち付け方があまり激しくなりすぎないように制御しつつ、「アー、アー」とその動きに合わせて声を出

してあげると、楽しそうに私を見て笑う。頃合いを見て、液晶画面をKちゃんの方に向けてやるが、Kちゃんは三脚を上下させる方が楽しいらしく、その遊びを続けている。ちょうどそのときKちゃんの背後を横切って台所に向かうお母さんの足が、液晶画面に映る(写真1)。Kちゃんはそれを見て、お母さんが歩いていった方向を振り返り(写真2)、台所のお母さんがどこにも行かないのを確認してから、また三脚で遊び出す。



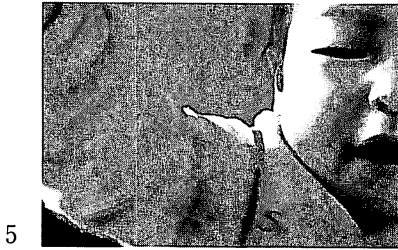
②しばらくビデオカメラから離れ、コップにプラスチック製のフォークを突っ込んだりして遊んでいたKちゃんが、また近づいてきて、三脚やレンズキャップをいじり出す。私が「不思議な物体だねえ、これ(ビデオカメラ)は」と話しかけながらそれを見守っていると、Kちゃんは大きく口を開けて「ウワー」と言いながら、液晶画面の方にぐんと顔を近づけたり、離したりする動作を2～3回繰り返す。そのとき私の中に「映像の意味が分かっているのかな?」という興味とちょっとしたいたずら心が出て、Kちゃんの背後にあったイルカのぬいぐるみにそっと手を伸ばして、「ビヨヨーン」と言いながら頭の後ろで持ち上げてやる(写真3)。液晶画面を見ていたKちゃんは、即座に振り返り(写真4)、イルカに手を伸ばす。



③それから再び三脚で遊んだり、「コンチワ」の遊び（Kちゃんが首をかしげるのに合わせて「コンチワ」と言ってあげると喜ぶ）をしたりしていたKちゃんは、おもむろに右手に持っていたプラスチック製のフォークを液晶画面に向かって「ハンパーイ」と突き出す（最近お母さんとコップでよくやるようになった「乾杯」のつもりらしい：写真5）。私はふざけて「ああ、ビデオ刺さないで」などと言うが、Kちゃんは画面を見ながら、もう一回フォークを突き出して笑う（ビデオの中の自己像もそれに応じてフォークを突き出すから、ちょうど乾杯をしているような形になるわけである）。

それから満足げに「ンー」と言いながら数秒間液晶画面をじっと見ていたKちゃんだが、何の気なしに右手を頭に持っていったときに、明らかに「あれ？」という表情になる（写真6）。そして、液晶画面を見つめたまま手の動きを確かめるように3～4回ゆっくり上下させてから、今度はじっと自分の右手を見つめ（写真7）、左手で右手を触る。私はその一連の動きに合わせて「あれ？あれ？なんだこれは？面白いねえ」などと声をかける。それからKちゃんは液晶画面の中の人物に向かって、わっと両手を伸ばす（写真8）。私が「あれ、これ、もしかしたら自分じゃないの？」と教えてあげると、それが分かったのか分からないのか、Kちゃんは再び落ちていたフォークを両手で持つ。私は「Kちゃん、ほら、ほら」と言いながら、画面を指差して、フォークを持ったKちゃんの両手を液晶画面に映る位置まで持って行ってやる。Kちゃんは画面に目に向け、少しだけそれを見ていたが、やがて再び画面にフォークを突き出す。それに合

わせて私が「グサッ」と声を出してやると、私の目を見上げ、少し間を置いて「ンエヘー」と笑う。それからビデオのあちこちをグサグサとフォークで刺してから、また三脚やイルカのぬいぐるみで遊び出した。



考察 3

エピソード2で液晶画面を鏡代わりに使うというアイデアの面白さに気づいた観察者は、その後Kちゃんがビデオカメラを触りにくるたびに画面をひっくり返してやるようになったが、エピソード2以降はこれといって目立った反応がなかった。ところが、この回にはいくつかの興味深い行動が観察された。

まず、ここでの①②のエピソードは、バーテンサルとフィッシャーの第3段階にも相当するもので、Kちゃんが自分の後方の空間と液晶画面に映る映像の協応関係に気づいていることを明らかに示している。視野外への指差し理解が生後12ヶ月の幼児でも難しいのは、幼児が空間表象をまだ作り上げていないことを示すものと理解されているが(Butterworth, 1995/1999)、少なくともここでのKちゃんの反応が可能になるためには、「視野に入るものが世界の全て」と

いう世界観ではなく、自分の背後の空間イメージというのが何らかの形で保持・記憶されていなければならない（実際、もしそうでなければ、すでに自由に動き回る行動能力を備えた幼児は、頭をひねり、方向転換するたびに「新奇なものにびっくり」しなければならないだろう）。逆にそうした空間イメージさえあれば、液晶画面に映る全てのものは普段から目にする見慣れた事物ばかりであり、映像と実物の協応関係を見出すのはそれほど難しくないと考えられる（唯一「見たことがない」自己像を除いては）。Kちゃんは、映像を通して自らの背後を確かに見ているのである。

そうように考えてくると、鏡（映像）に映る自己像の理解というのが、幼児にとってどれほど特別なことか見えてくる。直接見たことがあって、それを記憶しておけば良いその他の事物と違って、自分の姿というものだけは直接見ることが決してできない。自己像は、鏡（映像）に映るときだけ浮かび上がる「謎の人物」である。幼児がその「人物」を、最初は「鏡の世界にいつもいる友達」「生きた分身」のようなものとして感じていたとしても決して不思議ではない（Merleau-Ponty, 1962/1966, p151）。鏡（映像）に映っている見慣れた事物たちの前で、こちらを見ている「人物」が何なのか—これが「唯一の自分」だ—と考えるのは、もしかしたら大人だけの発想なのではないか。幼児はそれほど深い考えなしに、鏡（映像）に映る自分の背後の事物と「謎の人物」（ないしは「生きた分身」）の共存を受け入れているのではなかろうか。

逆に言えば、幼児がその「謎の人物」を「自分」だと同定するということは、見たことがないものの存在（他者からしか見ることができない地点）を自らの世界に引き入れるということであり、直接目に見える事物を映し出す道具だった鏡の世界に、自ら直接見ることのできる世界以上の優先権（実在性）を与えるということでもある。もう少し言えば、本質的に見えるものだけで構成されていた世界から、見えないもの—自分の姿、他者の内面、さらには物理学のニュートリノなどもそうかもしれない—がいくらでもありうる世界へと跳躍するということである。そういう意味で、（それが視野の中にあろうが外側にあろ

うが) 原理的に見えるものだけで構成された空間表象と、「自分」という暗点を含みこんだ空間表象は質を異にする。バターワースの言う空間表象は、恐らく後者であろう。

以上のように考えると、③のエピソードの重要性が浮き立ってくる。Kちゃんは液晶画面の映像に向かってフォークを突き出し、いつもは母親とコップを打ち合わせてやっている「乾杯」をするのである。これはKちゃんが今述べたような「謎の友達」として、一人の実在する「他者」として、画面の中の人物を捉えていることの証左ではなかろうか。しかも、うまいことにちゃんとその友達も「乾杯」をしてくれるのである。楽しい気分のときには(自分が笑えば)相手も笑って応えてくれる。幼児が自分の気持ちや動作—もう少し言えば、共感的な力動感(生氣情動 vitality affect: Stern, 1985/1989)—を映し返してくれる他者を好むのは動かしがたい事実であるが、鏡に映った自己像ほど自分の感覚とぴったりの力動感を(あくまで視覚的にだが)伝えてきてくれるものもないだろう。

ところが、興味深いことに、ここでのKちゃんは「あれ？」とでも言わんばかりに何かに気づく(いつもKちゃんがかかなり接近して画面を見ていたので、これまではKちゃんの顔と背後の空間しか画面に映っていないことが多かったのだが、この日はたまたま上半身全体が映るくらいの距離があった)。恐らく最初は何の気なしにふと頭に手をやったのだが、画面の中の「友達」も全く同時に頭に手をやるのを見て、表情と目つきが明らかに真剣な雰囲気が変わる。右手を上げ下げするときの運動感覚と、鏡の中の「友達」の力動感があまりに同期しすぎていることに違和感を抱いたのかもしれない(自己像が分かる前の話だから、大人のように自己の行動や運動についての視覚的イメージもできあがっておらず、あくまで共感的な力動感の同期性を感じたのだと思われる)。そして、右手をじっと見つめて、左手で触り、鏡の中の「友達」に向かって、わっと両手を伸ばす—多少解釈的になるが「あたかもその友達を捕まえにいくかのように」—のである。

「鏡の中の人物が自分だ」といふに分かった」まではいかないにしても一この後、すぐにまたフォークを突き刺す遊びに移行しているので、ここには鏡像段階が成立していく上で、非常に重要なプロセスがあるように見える。一言で言えば、それは自分の右手を「見た」ということ、「見られるもの」として扱ったということである。恐らくはモノをつかんだり、ハイハイのときに身体を支えたりするための「道具」、思いのままに使用できることがすでに当たり前になっていて、いちいちそれとして主題化し意識化しなかった右手という「道具」を、ある意味では自分自身とは切り離された対象として、周囲に存在する事物（見えるもの）と同じようなモノとして捉えたということである。左手でわざわざ右手を触って確認したのは、モノとしての右手を、道具としての左手を使用して触ってみたということではなかろうか。

ここにはすでに自分の身体を「見られるもの」として扱う視点—鏡像段階が成立するためには、見るための道具としての無自覚的・即自的身体を、見える対象として主題化・対自化する視点が必要である—の萌芽がある。Kちゃんの右手においては、今や自由に動くという能動性と、「見られるもの」としての受動性が交叉している。このエピソードにあるようなちょっとした違和感が身体—最初は身体の一部だろう—を「見られるもの」にし、これが積み重なることによって能動と受動の交叉が全身に広がって、ついには直接的に見ることのできなかった顔や頭部までもが「見られるもの」へと変貌する—鏡像段階が成立するプロセスの一部とは、そうしたものだと考えられる。

エピソード4 [0:11:27]

生後11ヶ月過ぎから歩けるようになったKちゃんは、机に手をかけながらだと安定するのか、机の周りをつたってビデオカメラを持っている私の方へ歩いてきた（写真1）。「ン、ア」と言いながら、おしゃぶりしていた右手を伸ばしてビデオを引き寄せようとするKちゃん。その動きに逆らわないで、私はビデオを机の向こう側に座っていたお父さんに向け、「ほら、これ見てごらん、パパ

だよ」と話しかける（この日は液晶画面をひっくり返すのではなく、まず通常のポジションでの撮影映像をKちゃんに見せてあげた）。

ビデオカメラに向かって手を振るお父さん（写真2）を、Kちゃんは液晶画面と実物の双方で確認している。そこで今度はビデオをKちゃん自身に向け、Kちゃんを映しながら「じゃあ、これは？」と問いかけて液晶画面を向けてやると、Kちゃんは「ン」と言って画面の端に5分の1ぐらいだけ映った自分の顔を見ている（液晶画面をひっくり返すと私の方からはどんな映像が撮れているか分からなくなるので、最初少し角度がずれて、Kちゃんの顔の一部しか映っていなかった）。それから角度が少しずれているのに気づいた私は、ビデオをきちんとKちゃんに向け直しながら「あら？あら？これKちゃんだよ」と話しかける。ようやく自分の顔がきちんと映し出された映像を見て、はっきり自分だと分かったのか、Kちゃんはちょっと照れ臭そうに笑いながら（写真3）、2～3歩後ずさりしてしゃがみこむ。その様子にお父さんも私も一斉にアハハハと笑い、私は「驚愕の、驚愕の後ずさり」とコメントする。

それからすぐにKちゃんはもう一度立ち上がり、再度ビデオを引き寄せる。私は「もう一回見るの？」と言いながら、またお父さんを映してやる。今度はさっきよりも念入りに、手を振るお父さんを画面と実物で確認するKちゃんに、お父さんは手を振りながら「誰が映ってる？」と話しかける。それから私がまたKちゃんを映して、液晶画面をKちゃんに向けてやると、今度はすぐにうれしそうに笑う（写真4）。それを見て大人たちがアハハハと大声で笑ったので、Kちゃんはちょっとびっくりして後ずさりしたが、笑顔はそのまま、またすぐに近づいてくる。私が「あれ、（自分だと）分かったかな、これは」と言い、もう一回、お父さんを映してKちゃんを映すという手続きを繰り返すと、Kちゃんは再び液晶画面に映った姿を見て笑う。間違いなくKちゃんは分かったという手応えが生じて、私は「あ、分かったな」と言うとともに、「これ、自分やで」と画面を指差しながらKちゃんに話しかける。それに答えるようにKちゃんは「ンエ」と言い、お父さんも「Kちゃんが映ってるんだよ」と教えてあげる。そ

れからはお父さんを映してあげたり、台所から出てきたお母さんを映してあげたりして、しばらくビデオでKちゃんと遊んでいた。



考察 4

歩き始めてから3週間ほどが経過し、かなりしっかりとした歩き方になってきたKちゃんは、見る者に一段としっかりとした印象を与えるようになっている。そんな中で生じたこのエピソードは、観察者に「間違いなくKちゃんは自分の姿が分かった」という手応えを与える非常に印象的なものであり、本稿を執筆する一番のきっかけとなったものだった。Kちゃんが自分の姿が分かったと観察者に感じられたのはなぜなのか、そしてここでどんなことが起こっていたのかを考えてみたい。

まず、観察者の中に「Kちゃんは自分の姿を分かった」という確信を与えたのは、やはり、何度も自分の姿を映し出してはうれしそうに笑ったというKちゃんの能動性だろう。これ以前のエピソード2、3も確かに一瞬はっとさせるものを含んではいたが、それはあくまで「観察者が液晶画面を見せて、それに対

してKちゃんが興味深い反応を示す」ということに留まっていた。しかし、このエピソード4では、Kちゃんは明らかに自分の方から鏡像（自分の映像）を求めて、能動的に振舞っている。父親を映しておいて、それから自分の姿を映すという手続きを繰り返させるということは—この手続き自体はもともと観察者が主導して作り出したものであったが、Kちゃんは何度もそれを再現させようとする—、まずビデオというものがどういうものであるかを理解した上で、そこに映っているのが自分であることを確認しようとしているということである。ビデオという機械がどういうものなのかが分かっているか否か判然としなかったエピソード2、3と比べて、ビデオの意味をかなり理解し、これを「使いこなして」いるわけであって、そこに「確かにこの子は私たち大人と一緒にの楽しみを共有している」という確信が生まれたわけである。

ただし、こうした一連の行動と反応は、単なる認知能力の発達のみによるものではないだろう。むしろそうした要因も無視できないが、それ以上に重要なのは、ここでのエピソードが3人（Kちゃん、父親、観察者）での楽しい遊びという雰囲気を持っていたことである。Kちゃんは、何も認知的に自分の姿やビデオの意味が分かったことがうれしかったのではないように見える。そうではなく、やはり、まず父親の姿がビデオに映り、それから自分の姿がビデオに映るということ、すなわち父親と同じような「見え」ないしは「形態」が自分にもあることを発見したこと、それがうれしかったのではないか。自己像を自分の姿として引き受ける（同一化していく）というプロセスを支えるのは、Kちゃんの身体内部に渦巻く不協和の感覚や、認知的発見の喜びというよりは、むしろ周囲の他者たちと全く同様に、自分もまた「それ＝自己像」を共有しているという喜びなのではないか。他者との間身体的な関係性がここでも非常に重要な役割を果たしていると思われるのである。

私たちが通常、鏡で自己像を見るという体験はどういうものか。今、身体内部から感じられている一個の自分という感じを内受容的自己感、鏡に映る映像を可視的自己像と呼ぶことにすると、鏡を見てそこに映っているのが自分だと

分かっている感覚というのは、見る者としての内受容的自己感(「ここ」)と見られる者としての可視的自己像(「そこ」)とが混交し、次々に入れ替わるのに似ている。例えば、鏡を見て寝癖を直すとき、「ここ」で触られている髪の毛の感覚は鏡の中の「そこ」にあるかのような。逆に少し注意の方向を向け換えれば、鏡の中の「そこ」に見えている寝癖はまさに今「ここ」にあるかのように感じられる。鏡像認識ができるということは、見る者としての内受容的自己感を見られる者の位置(「そこ」)に送り込み、見られる者としての可視的自己像を見る者の位置(「ここ」)へと引っ張り出してくるという循環を際限なく繰り返すということである(図1)。

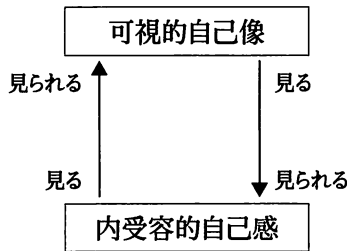


図1 鏡像認識の際の可視的自己像と内受容的自己感の循環

ここでのエピソードでは、Kちゃんにおいてこの循環が生まれやすくなるための条件が整っていたと考えられる。すでにエピソード2の時点で、液晶画面に対して観察者との共同注意が見られていたが、このエピソード4ではまず画面の中の父親と一緒に眺め、その直後に自分自身と一緒に眺めるという二重の共同注意が生まれている。特に後者の共同注意では、Kちゃんの内受容的自己感としては、可視的自己像を見ている感覚と、観察者によって見られているという相補的身体感覚とが混在していたに違いない(図2)。

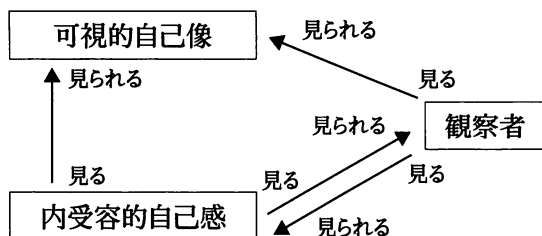


図2 エピソード4で生じた三角形の構図

すなわち、まず父親と一緒に眺めたことで、ビデオの意味が確認されると同時に、観察者との同型的な視点の重ね合わせが達成される。その同型性を保ったまま観察者と一緒に自分の映像を見るというとき、この三角形の構図における観察者と内受容的自己感それぞれの位置を行き来できるような条件が、通常共同注意以上に整っていたと思われるのである。「見る者」が「見られる者」になり、「見られる者」が「見る者」になる。その結果として、このエピソードではKちゃんにおいて、図1に見たような循環がかなり生まれやすくなっていたのだと思われる（「観察者」の位置に「内受容的自己感」が入り込むのに伴い、「内受容的自己感」が「可視的自己像」に変化すると考えれば良い）。

このように、図1の循環が達成されるということと、図2のように主体が他者（観察者）の視点を取り入れるということとは、密接な関連がある。そういう意味で、共同注意は鏡像認識が可能になるための必要条件であるとも言えるかもしれない。

なお、ここでのエピソードでKちゃんがビデオに映った姿を自分自身だと認めたのはまず間違いのない—今述べた理由により、普通の鏡を見る場合よりも鏡像認識に有利な状況になっていたことを考慮に入ると、「初めて」の鏡像認識であった可能性もかなり高い—と思われるが、この経験がどれだけ汎化されるかということについては疑問が提起されるかもしれない。例えば、ビデオではなく鏡を使ったときにも同じように自分の姿が分かるのか、自分の映った写真

だったらどうか、といったことである。メルロ＝ポンティは、“像は、成人においてさえ、決して実物の単なる反映ではなく、むしろ実物の「準現前」でもある” (Merleau-Ponty, 1962/1966, p158) と述べて、幼児が鏡像認識を得た後でも、例えば「影」に対してそれがあたかも自分の生きた分身—ちょうど鏡像認識に至る前の幼児にとって、鏡の中の自己像がそうであったように—であるかのように感じ続けることを指摘している。鏡像認識というのは一般的認知能力—鏡像を単なる自己の反映にすぎないもの、非実在の単なる「見かけ」と考えられるような理知的な能力—の発達では片付けられない奥深さを備えており、このエピソードをもって鏡像段階の完成とはとても言えないところがある（むしろ私たちは鏡像段階とは何かという問いに再び差し向けられるのだ）。ただし、その一方でビデオ映像にしろ、鏡像にしろ、写真にしろ、明確な自己の視覚像である点では共通しており、「影」のような全く質の異なった「像」であるというわけではないから、ここでの経験がある程度までは汎化され、Kちゃんの世界観に対して多少なりとも影響することは十分に考えられる。それを裏づけるかのように、このエピソードから数週間後、母親から「最近の写真を見て笑っている」という情報を得たことを付け加えておく。

5. まとめに代えて

以上、本稿では幼児の生きる体験世界に焦点を当てながら、鏡像段階が成立していくプロセスについて検討してきた。従来型の認知論的用語ではなく、身体の同型性・相補性という幼児の（さらには養育者や観察者の）体験に近い用語で共同注意や意図性といった概念を捉え直し、鏡像段階とは何か、それはいかなる条件によって可能になるのかを探った。いくつかの問題について試論的に議論を進めたが、紙数の問題もあり、ややまとまりを欠いた感は否めない。そこで、本稿で得られた示唆のうち特に重要なものを簡単に列挙しておく。

まず、考察3で述べたように、普段目に見える事物に比べて、鏡の中の自己

像というのは非常に特殊な対象である。それを自分のものとして引き受けることは、直接的には「見えないもの」を鏡ないしは他者の視点を借りて補いつつ、その「見えないもの」(暗点)を含みこんだ世界に生き始めることである。そこにこそ初めて他者(の内面)という「見えないもの」、不透明なものが設立されるのではないか。他者が自分とは別個の意図を持つことを理解するということは、そのような意味で、鏡像段階が進むプロセスと相互促進的な関係にないだろうか。

第二に、鏡像段階が成立するまでの一過程として、自らの志向性の基点となっていた能動的身体(の一部)が受動的な「見られるもの」へと対象化される契機が必要である(考察3)。鏡像認識を得ているときの内受容的自己感と可視的自己像の循環(考察4)とは、ある意味では「世界全体に行き渡っていた」内受容的自己感を、「見られるもの」へと「モノ化」することによって、限定された「容れ物」に収めるプロセスであるかもしれない。だとすれば、従来の発達心理学諸研究が導入していた前提—他者から切り離された自己意識という前提—は、鏡像段階を経て初めて私たちの体験世界に導入されるものなのではないか。

第三に、自己像の引き受けは個体の内的世界での認知的発見としてというよりは、むしろ周囲の人にもある「それ(自己像、見え、形態)」が自分にもあるということの喜びとして関係論的に動機づけられているのではないか。したがって、鏡像認識が初めて成立する際には、周囲の人たちと一緒に「それ」に対して共同注意を向けるという体験が、跳躍のための重要な踏み板になるのではなかろうか。何にしても、本稿での鏡像認識のエピソードが先行研究に比べてかなり早い時期に観察された背景には、ビデオで一緒に遊ぶ観察者の存在があったことは確かである。

以上のような視点をヒントにしつつ、本稿で行ったそれぞれの議論を深化、統合し、鏡像段階論の有する豊かな意味を発達心理学領域で展開させていくことが今後の課題である。

文 献

- 麻生 武 2002 乳幼児の心理—コミュニケーションと自我の発達 サイエンス社
- Baldwin,D. 1995 田中利信(訳) 1999 共同注意と言語の結びつきを考える
Moore,C. & Dunham,P.(編) 大神英裕(監訳) ジョイント・アテンション
—一心の起源とその発達を探究, pp.119-143. ナカニシヤ出版 (Joint Attention
—Its Origins and Role in Development. Edited by Moore,C. & Dunham,P.
Lawrence Erlbaum Associates, Inc.)
- Butterworth, G. 1995 大神英裕(訳) 1999 知覚と行為における心の起源
Moore,C. & Dunham,P.(編) 大神英裕(監訳) ジョイント・アテンション
—一心の起源とその発達を探究, pp.119-143. ナカニシヤ出版 (Joint Attention
—Its Origins and Role in Development. Edited by Moore,C. & Dunham,P.
Lawrence Erlbaum Associates, Inc.)
- 浜田寿美男 1999 「私」とは何か—ことばと身体との出会い 講談社
- 岩田純一・吉田直子・山上雅子・岡本夏木 1992 発達心理学 有斐閣
- 鯨岡 峻 1997 原初的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房
- 鯨岡 峻 1999a 関係発達論の構築 ミネルヴァ書房
- 鯨岡 峻 1999b 関係発達論の展開 ミネルヴァ書房
- 鯨岡 峻 2005 エピソード記述入門 東京大学出版会
- Lacan, J. 1966 宮本忠雄・他(訳) 1972 エクリ I 弘文堂
(Écrits.)
- Merleau-Ponty, M. 1962 滝浦静雄・木田 元(訳) 1966 幼児の対人関係 眼
と精神, pp97-192. みすず書房
(Les relations avec autrui chez l'enfant. Les cours de Sorbonne, Centre de
documentaiton universitaire.)
- Merleau-Ponty, M. 1988 木田 元・鯨岡 峻(訳) 1993 意識と言語の獲得
意識と言語の獲得 ソルボンヌ講義録 1, pp1-126. みすず書房
(Merleau-Ponty à la Sorbonne, résumé de cours 1949-1952, édition Cynara)
- 大倉得史 2002 拡散 diffusion—「アイデンティティ」をめぐる、僕達は今 ミネ
ルヴァ書房
- 大倉得史 2008 語り合う質的心理学—体験に寄り添う知を求めて ナカニシヤ出
版
- Piaget, J. 1948 谷村 覚・浜田寿美男(訳) 1978 知能の誕生 ミネルヴァ書
房

- (La naissance de l'intelligence chez l'enfant. 2 ed.)
- 新宮一成 1995 ラカンの精神分析 講談社
- 新宮一成・立木康介(編) 2005 知の教科書 フロイト＝ラカン 講談社
- Stern, D. 1985 小此木啓吾・丸田俊彦(監訳)神庭靖子・神庭重信(訳) 1989 乳児の対人世界―理論編 岩崎学術出版社
- (The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. Basic Books, Inc., New York)
- Tomasello, M. 1995 山野留美子(訳) 1999 社会的認知としての共同注意 Moore,C. & Dunham,P.(編) 大神英裕(監訳) ジョイント・アテンション―一心の起源とその発達を探る, pp.93-117. ナカニシヤ出版 (Joint Attention―Its Origins and Role in Development. Edited by Moore,C. & Dunham,P. Lawrence Erlbaum Associates, Inc.)
- 塚田みちる 2001 養育者との相互交渉にみられる乳児の応答性の発達的变化:二項から三項への移行プロセスに着目して 発達心理学研究, 第12巻, 第1号, 1-11.
- 常田美穂 2007 乳児期の共同注意の発達における母親の支持的行動の役割 発達心理学研究, 第18巻, 第2号, 97-108
- やまだようこ 1987 ことばの前のことば ことばが生まれるすじみち1 新曜社